



4年生：真綿づくり

◆ つながりをつくる

学校で地域とのつながりを意識的につくっていくこともできます。

先日、啓明学園のある昭島市の「環境フェスタ」という行事に、環境委員会の児童が鶴のことを調べたレポートを展示しました。するとそれを見た98歳のおじいさんが、鶴の発表をした学校の子どもたちにと、得意の折り紙細工で作った鶴と亀などのりっぱな作品を持ってきてくださいました。子どもたちは、細かいところまでいねいに折ったできばえに感心しながら、じっと見入っていました。折り紙をやってみたくなったという子どもたちもいます。

地域のお年寄りに啓明の子どもたちのがんばりを評価していただいたことも、お年寄りが子どもたちの元気な成長を願いながら時間をかけて折り紙を作ってくださったことも、そのことを子どもたちが知ったことも、たいへんうれしいことでした。おじいさんは、地域の人が啓明の子どもたちをちゃんと見ていてくれることを教えてくださったのです。

その方が住んでいる老人ホームには、毎年6年生と中高の聖歌隊がお邪魔してお年寄りとの交流をしています。運動会の際には、学校のある拝島地区に伝わる踊りを地域の方々に指導していただきました。以前と変わったと言っても、地域の中で子どもが育てられる出会いはまだまだ作ることができるのです。

子どもたちが、自分自身の親や先生だけでなく、たくさんの大人に見守り育てられているという感覚を持つことは、安心して生活するためにも、自分の行動に気をつけるためにも、大切なことだと思います。

◆ 外国に住むとき

外国に住んでいても、子どもにとって、家庭と学校だけでは十分でないのは同じです。子どもに豊かな経験をさせるためには、工夫が必要です。アメリカの場合、特にミドルスクール以上では、日本のように学級単位での学校生活ではないので、学校でもなかなか友だちができなかったりする場合があります。スポーツチームや、学校や地域のクラブ、ボランティアなどの活動に参加することは、大きな助けになります。図書館などで地域の情報を集め、イベントやグループ活動に顔を出してみるのもいいでしょう。もしかしたら、日本では弱っている地域の教育力が、外国ではしっかり発揮されているかもしれません。

我が家は、2回の外国暮らしがありますが、最初のドイツで親しい家族ができたのは、生まれたばかりの赤ちゃんだった娘のおかげでした。2回目のアメリカでは、一番親しくなったのは、息子のサッカーチームのメンバーの家族でした。子どもがいれば、赤ちゃんの散歩から始まって、遊び場、学校、スポーツなど、親も否応なしに地域の人々の中に出て行かなければなりません。もし子供たちがいなかったら、地域を知り、人々と親しくなることは、もっと難しいでしょう。家族の生活の中で、親が子どもに感謝しなければならないことはいろいろありますが、これもその一つです。



6年生：「茶の湯」の学習



啓明学園と海外経験の実例を挙げて、地域社会とのつながりと経験をとおして、子どもを教育していくことの大切さの指摘です。

「北米で育った日本人の子どもは『社会性』が乏しい」と聞くことがあります。海外での強い「家族の絆」ゆえに、目立つのでしょうか？しかし、よく見ると、佐々先生の指摘どおりに、スポーツなどの活動を通して、友人に恵まれ、人前でも立派な態度をとれる子どもが海外には多くいます。そして例外なく、その子ども達の活動を支えているのが、運転手としての保護者、特にお母さんです。お母さんの地元地域との関わり方一つで、子どもの「社会性」に差が出るようです。

我が家のお母さんが、現地校の子どものクラスの「Culture Day」に参加して折り紙を教えた時の、「誇り満ちた我が子」と「褒め称えるクラスメート」の光景が忘れられません。

「英語」など気にしないで、子どものクラスに参加してみませんか？